

立場を越えた理解を大切にしたい

2年間、環境保全の分野に携わってきた赤塚楨平さん。そこで実感したのは、一つの案件にはさまざまな立場の人が関わり、その軸足も、今と未来で異なること。その難しさを感じながらも、日々職務に奔走している。

きっかけは 旅先での偶然的出会い

大学時代、友人とカンボジアを旅行した時、私にとって一つの転機が訪れました。湖でボートのドライバーをしている男性から、「稼いだお金は全て語学の勉強に使っている」という話を聞いたのです。理由は、自分自身の生活環境をより良いものにするため。しかし、いくら努力をしても、生活を改善させることは並大抵のことではないと聞いた時、初めて国際協力に興味を抱きました。

私は幼い頃から母子家庭で育ち、さまざまな面で制限された学生時代を過ごしてきました。それをコンプレックスに感じる時もありました。それでも、アルバイトをして少しずつ環境を変えていくことができました。そんな自分自身の経験とも重なり、開発途上国であっても全ての人が可能性を切り開いていけるチャンスに溢れた社会をつくりたいと思い、JICAを志すようになりました。

環境を守る大切さを 日本の経験から伝える

入構3年目で、地球環境部に配属されました。担当した中で印象に残っている案件は、ラムサール条約に登録されているイランのアンザリ湿原を保全するプロジェクトです。この湿原は、上流域からの土砂や下水などの流入によって環境の悪化が進んでいたため、日

本が協力して対策を講じるようになったのです。

成功の鍵を握るのが、湿原があるギラン州政府の理解を得ること。そこで、州知事を日本に招き、日本の環境保全活動を紹介しようと考えました。視察先の一つが、かつて汚染が深刻だった琵琶湖。住民が合成洗剤に代わり、粉せっけんの使用を推進した「せっけん運動」をはじめ、全ての利害関係者が参加して琵琶湖の保全に取り組んだことで、水質が改善された経緯を説明しました。また、地元の民間企業を訪れ、環境保全活動が雇用の創出にもつながっている事例を紹介しました。滞在期間中は、送り迎えや食事の面などに気を遣わなければならず苦勞もありましたが、何よりも地域が一带となつて取り組む重要性について理解を深めてもらうことができ、大きな成果があったと思います。

プロジェクトを通じて 見えてきたこと

地球環境部で学んだことは、さまざまな立場の人から声を聞くことの大切さです。イランのプロジェクトには、自治体、関係官庁、水道公社、NGOなどの多くのセクターが関わっています。意見が一致しないこともしばしばですが、まずは話を聞き、それぞれの立場を理解した上で、お互いに協力し合える仕組みを構築していくことを心掛けます。



JICAマラウイ事務所

赤塚 楨平

AKATSUKA Shinpei

大学卒業後、2011年にJICAに就職。調達部と地球環境部をそれぞれ2年間経験し、今年7月より現職。



イラン・ゲシュム島で「エコアイランド構想」の実現に向けたプロジェクトを立ち上げるため、現地の職員と協議(右端)

した。入構当時から、途上国の暮らしを改善したいと考えていた私は、初めのころは、環境プロジェクトの軸足が今よりも、未来に向いていることに戸惑いを感じました。しかし、いくつかのプロジェクトを経験した今では、今と未来の両方と向き合い、持続可能な社会を作っていくことが重要だと考えるようになりました。さまざまな立場の人たちと共に考え、ぶつかったりしていきたいと思っています。

7月からは、世界最貧国の一つ、マラウイの事務所でも主に社会開発を担当しています。これまでとは異なり、今を生きる人の立場に立った支援がより必要となりますが、未来を考える立場を理解することができた経験は、自分自身の強みにしていきたいです。国際協力に携わる上で何ができるのか。これからの答えを見つめる本道の始まりだと思っています。



イランの森林再生プロジェクトで、地元住民からヒアリングを行う赤塚さん(右から2人目)